

最古期の将棋棋譜の最新AIによる再検証

古作 登

大阪商業大学公共学科

nkosaku@daishodai.ac.jp

概要：江戸初期の将棋棋士の棋譜について筆者は以前から研究対象としてきたが、本稿ではこの10数年でトップ棋士の実力を超え、さらに進化を続ける将棋AI(人工知能)による分析を加え、なぜ最初期から角道を止める「振り飛車」が後手番を中心に多く指されたのか、またそれに対抗する居飛車側の「右四間飛車」が多く用いられたのかなど、定跡が確立していなかった当時の棋士たちの思考を現代の視点から分析する。数は少ないが、相居飛車や相振り飛車など力戦系の棋譜についても解析を試みる。また、最初期の棋譜から「香落ち」の実戦も合わせて研究対象とし、当時の上手と下手が駒落ちのハンディをどのように実戦に認識し対局の着手に反映していたかについての考察も行う。

キーワード：振り飛車、居飛車、右四間飛車、大橋宗桂、本因坊算砂、大橋宗古、香落ち

1. 研究の背景及び目的

日本における将棋の歴史は平安時代に遡ることができ、最初期の将棋は「平安将棋」(36枚制)と呼ばれ、現在の将棋と同じ9×9マスの盤面で遊ばれたが、現在とは違って取った駒の再利用はできなかったと考えられる。近年の研究では室町時代のころには平安将棋に飛車と角行を加え40枚制とし、持ち駒ルールとした現行の将棋とほぼ同じ「小将棋」が成立したと考えられており、ゲームバランスが優れていたため公家や僧侶、武士などの支配層に普及した。戦国時代も後期になると将棋の達人の名が歴史資料に登場するようになり、盤上技術の進化と伝承が行われるようになったと推測される。本稿では記録の残る江戸時代初期の棋譜から当時の技術レベルと進化について考察を試みる。

2. 先行研究と研究方法

江戸時代の棋譜に関する技術的な観点を交えた出版物は1970年代後半に筑摩書房から刊行された「日本将棋大系」(全18巻・図式集3巻含む)が著名で、各巻にプロ棋士の解説と当時の時代背景に関する資料が加えられているが学術書の形態をとってはならず、棋譜の分析に関しても棋士の主観が反映された読み物だった。同著を参考文献としこれまで筆者はアマ高段レベル以上の将棋AIを用いて2012年以降江戸時代の棋士の実力に関連した論文をいくつか発表した。当時と比べ最新のAIは大駒一枚(角行または飛車)以上実力が向上しており、新たな知見が得られると推定できる。また、本稿では過去になかった最初期の駒落ち将棋(香落ち)についての解析も行う。

3. 得られた知見

最初に分析したのは最古の棋譜と考えられる大橋宗桂(将棋一世名人)一本因坊算砂(囲碁一世名

¹ コンピュータ将棋開発者へのインタビューでは「毎年前年のバージョンに7割勝つレベルでAI(将棋ソフト)は進化している」という

人)の平手戦で1607(慶長12)年の対局である(大橋宗桂の先手)。棋譜解析には2025年の第35回世界コンピュータ将棋選手権2位となったソフトの思考エンジンを用いた。最古の棋譜は図1のように後手が四間飛車、先手が右四間飛車2の出だしから、玉を囲い合った中盤に入る直前の局面(40手目)では評価値はほぼ互角の数値(先手プラス約200点)を示しており、それまでの双方の指し手に疑問手と思われる手はなく、**両者の実力は相当高かったと推定できる**。その後に駒組の膠着状態から先手が仕掛けたのがやや無理筋で、後手がやや有利の中盤戦となったが決定的に差が開くことはなく終盤まで接戦が続いた。勝負は土壇場での逆転劇で先手の大橋宗桂が勝利したが、**現代の視点から見ても双方に好手があり、迫力十分の名局と評価できる**だろう。

この将棋から8年後に指されたとされる両者の対局も後手の算砂が四間飛車を用いたが、先手の宗桂は右四間飛車に加え「腰掛け銀」の構えを用いた(図2)。これは現代でも用いられる優れた作戦で、**数年の間に序盤戦術の明確な進化が起きたと推定できる**。

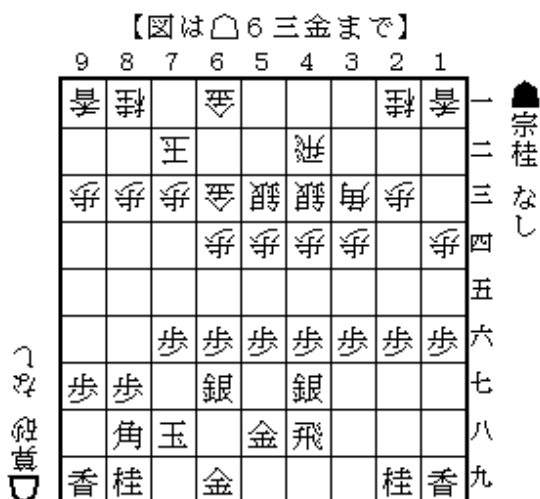


図1 最古の棋譜

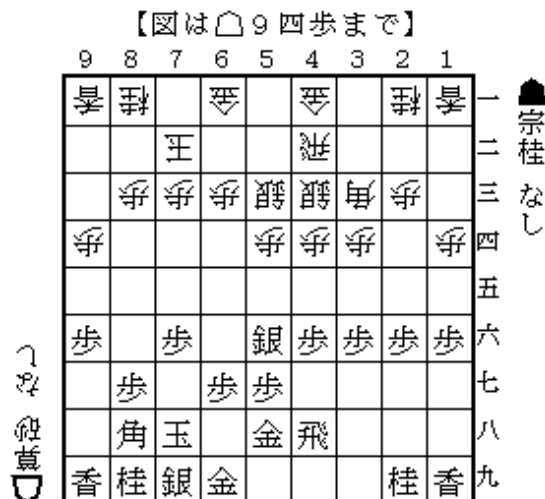


図2 先手右四間飛車+腰掛け銀の構え

続いて分析したのは駒落ち将棋の棋譜としては最古となる右香落ちで、上手が本因坊算砂、下手は大橋宗古(後の二世名人)。宗古は宗桂の子で、算砂に指導を依頼した形での対局と思われる。手合いは「平香交じり」(上手から見て平手の後手番と香落ちを交互に指す)で行われた。**駒落ちがどのような経緯で指されるに至ったかについての説明は当時の文書からは見つけることができていないが、囲碁の世界同様に第一人者とその座を追いかける者との対局は、古くからある程度のハンディをつけて行うことが常識とされていた可能性は高い**だろう。

最古の駒落ちの初形は図3。AIの解析では下手プラス400点(下手有利)なのは上手に香車が一枚ないだけに当然といえるが、開始から15手経過した図4の局面の評価値はほぼ互角を示し、下手が振り飛車を用いるだけで評価値を落としている。AIが示す下手の最も有力な戦略は居飛車で、この戦略が示されたのは200年ほど経過した江戸時代後期になってからである。「右香落ち」はその後指されるようになった「左香落ち」に比べると定跡も整備されず、左香落ちの変化が多彩で面白いこともあって江戸時代中期に入ると次第に廃れていった。勝負に関しては中盤で上手の算砂が圧倒的優位に立った(評価

² 盤の右から4番目の筋に飛を転回する作戦のことで現代のプロ公式戦でもしばしば用いられる

値プラス約 1500 点＝勝勢)が、宗古が終盤で逆転して勝利を収めている。

【図は右香落ちの初形（上手番）】

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		桂	銀	金	王	金	銀	桂	香	一
		飛						角		二
		歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	三
										四
										五
										六
ひ		歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	七
な			角					飛		八
ぬ	香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香	九

宗古 なし

図 3 最古の駒落ち(右香落ち)対局

【図は△3二玉まで】

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		桂		金		金	銀	桂	香	一
		飛					王	角		二
		歩		銀	歩	歩	歩	歩	歩	三
			歩				歩			四
		歩								五
			歩	歩						六
ひ		歩	歩	角		歩	歩	歩	歩	七
な			銀	飛			玉			八
ぬ	香	桂		金		金	銀	桂	香	九

宗古 なし

図 4 下手は常道の振り飛車を用いた

4. 知見に対する考察や今後の課題

本稿ではまず最古の平手将棋の棋譜を最新のAIを用いて再検証してみたが、14 年前の研究で得られた知見と変わらず 400 年以上前のトップ棋士たちの実力が非常に高いことが再確認できた。また初めて最古期の駒落ち将棋に関しても検証してみたが、「右香落ち」に関してはハンディキャップとしては差が少なく、序盤の戦略の選び方次第でたちまち下手の優位性が失われることがわかった。こうした理由で江戸時代中期には香落ちとしては「左香落ち」が主流になり、現代の様式に受け継がれていると推測される。これらの知見に基づき今後江戸時代に残された平手、各種駒落ち将棋に関する研究を深めていく。

参考文献

- [1] 勝浦 修 1979 『日本将棋大系第一巻 初代大橋宗桂・二代大橋宗古』 筑摩書房
- [2] 古作 登 2012 『最古期の将棋棋譜の最新手法による再評価:400 年前の名人の技術は現代においても通用するか』 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要(14)p67-83